

## 『箋注倭名類聚抄』

【書名】 和名類聚抄箋注、k、1

【卷冊】 一〇巻

【別書名】

【1】 和名抄考証（わみようしようこうしよう）

【2】 箋注／倭名類聚抄（せんちゆう／わみようるいじゅしよう）

【3】 和名類聚抄考証（わみようるいじゅしようこうしよう）

【分類】 注釈

【著者】 狩谷／望之（狩谷／椽斎）

【成立】 文政一〇年

【国書所在】 【写】 国会（一〇冊）、国会亀田（巻一・四・六・九・一〇、嘉永六写八冊）、内閣（巻三・八・九、文政五自筆稿本、三冊）（巻一・二欠、自筆稿本、八冊）（巻一、自筆稿本、一冊）（巻二、自筆稿本、一冊）（巻三残欠、自筆稿本、一冊）（巻八欠、稿本、天保年間自筆等、一一冊）（巻一〇残欠、稿本、一冊）（巻一校譌異体字辨、稿本、一冊）（巻七・九・一〇校譌異体字辨、稿本、三冊）、静嘉（付録共一一冊）（付録共六冊）（二〇冊）（欠本、五巻五冊）（欠本、二巻二冊）、宮書（一〇冊）、京大（「和名類聚抄校譌異体字辨」、一冊）、慶大斯道（二冊）、東大（二〇冊）（巻八欠、一二冊）（巻二・四・八、六冊）（「和名類聚抄校譌并異体字辨」、明治写一冊）、東大本居（六冊）、東北大狩野（桔梗考の内）、日比谷河田（巻四・八・一〇、四冊）、山口（四冊）、金刀比羅（六冊）、神宮（一一冊）（調度部

校譌并異体字辨、昭和写一冊）、鈴鹿（二〇冊）、大東急（付録共一六冊）、穂久邇（一九冊）、無窮神習（巻七・一〇、九冊）（「和名抄箋註」、五冊）【複】 【活】 箋注倭名類聚抄（明治一六）（昭和七）【臆】 和名類聚抄校譌異体字辨（山田孝雄、大正八）【複】 古典索引叢刊一・箋注倭名類聚抄（大正一〇）  
著作種別 和古書

No. 書名 コレクション略称 請求記号 刊写の別 刊年 or 書写年 形態 冊数 残欠 書誌種別  
1 和名類聚抄 東大本居 4617911 写 六冊 M  
2 和名類聚抄 大和文華 257123611 K858 写 一〇冊 M  
3 和名類聚抄考証 大洲凶矢野 四六八 写 1冊 卷三ノ下存 K

## 《「いよびの実際」「やめ【鮫】」

中島満 「箋注倭名類聚抄」巻第八「明治16年印刷局刊版・国会図書館蔵十巻本使用、  
注 by MANA: なかじま・みつる」の引用部を次に記載しておく。 テキスト・現代語訳・

鮫 陸詞切韻云、鮫音交（一〇下総本には、「和名」二字あり。「本草和名」、「新撰字鏡」も同じ訓みを与えている。

又、「新撰字鏡」に載る、「台」、鯉、「因」についても、皆同じ訓みである。}

魚皮有文、可以飾刀劔者也、（一〇掖斎按うに、説文は、「鮫海魚、皮可飾刀」と云う。玉篇は、「鮫、「昔」属、皮有文」と云う。陸詞は蓋し、之を本にしている。廣韻は、また「鮫、魚名、皮有文可飾刀」と云う。山海経「中山経」は、「漳水流れ出て、その中に、鮫魚が多くいる」と云う。山海経注に、「鮫は鮒魚の類であり、皮には珠の文様があ

り、堅い。尾の長さは三、四尺あり、人を螫す毒はもっていない。皮は、材料の角（カドか、端のほうか？）を磨き細工し、刀剣を飾るのに使われる。」

〔注〕 「人を螫す毒はもっていない」：原文：未有毒螫人；「末（いまだ……せず）」を「末（マツ：スエ）」とすると、意味が逆転し、尾の先の部分に毒があり、人を螫す、となる。このほうが自然な読みの流れであろう。『康熙字典』も「末」であり、「末」のほうが正しいようだ。たしかに、鮫魚を、河にすむ魚と云う解釈から、サメのような魚ではないとすると、「末」のほうが正しいと云うことになる。しかし、鮫皮については、抄「調度部、弓劔具、鮫皮」に本草音義を引用して「鮫魚皮装刀木十霸者也」があるので、本項は明らかに「サメ」について源君は描いていることが推測されることから、エキ齊は「末」を「末」に読みまちがえたのか、引用郭璞注の元文にそうあったのか、要検討としておきたい。

兼名苑云、一名氏魴、<sup>低迷</sup>（○『本草和名』は、同じ書を引く。低迷二音もまた、『本草和名』と同じ。掖齋按う。『廣雅』に「河氏魴也。氏音齒之」という。玉篇に「氏尺戸切、鮪氏也」と云う。『廣韻』に「氏處脂切、魚名」と云う。音義並異。（掖齋按うに）恐らく、同じ字ではないのだろう。「魴」字は、『玉篇』、『廣韻』、『集韻』には未收載。鮫の「一名氏魴」は、出典が不明である。掖齋按うに、『玄應音義』は、「氐彌、律中低彌皆作迷字、應言帝彌祇羅、此云大身魚也」（第二卷大般涅槃經卷三十六）と云う。則ち、「氐彌」は魚名であり、梵語の対訳であったのを、後人が魚扁に改め「魴魴」に作ったものであることが知れよう。『龍龜手鑑』は、「魴の音は低」「鱧は俗字にして音は彌」とする。まさに、これが、その「大魚」のことであり、「鮫」の一名に相当する。『兼名苑』はまた、「摩竭」を「鯨」とす。その意図するところは同じであるのでここは略す。下総本「魴」は「魴」に作り、伊勢廣本も同じ。『龍龜手鑑』もまた、「魴」に作る。掖齋按うに、『干祿字書』に「互氏上通下正、諸從氏者竝準此」と云う。」

〔注〕 「サメ」の語源が「梵語」（サンスクリット）の「氐彌」＝作迷（サミイエイ：メイ）の対訳からきているという、掖齋のこの「箋注」は、これまでの魚名考証の中では、触れられてこなかったことであり、注目すべき整理である。

本草云、一名「昔」魚、<sup>上倉</sup>（○証類本草、蟲魚部、下品に「鮫魚皮即装刀靶「昔」魚也」と云う。『本草和名』に「鮫魚一名「昔」魚皮、此云一名」と云う。則ち、源君は蓋し、『本草和名』に従い之を引用したのである。『説文』に、

「昔」字なし。蓋し、是（鮫）の字と魚皮との交錯によって「昔」魚」と名したものであろう。後に、魚を从え、「昔」の字に作ったのだらう。」

拾遺云、一名鯊魚、（上音沙、字亦作「少」）（○『證類本草』蟲魚部下本に「鮫魚皮即装刀靶「昔」魚皮也、」と云う。『本草和名』に「鮫魚一名「昔」魚皮、」と云う。此の「一名を云う」とあるように、源君は、『本草和名』のこの記述を引用したのでらう。『説文（解字）』に「昔」字は載っていない。これらのことからすると、魚皮と錯とが交わって「錯魚」となり、後に、魚を从え、「昔」に作ったのであろう。」拾遺云、一名鯊魚、（上音沙、字亦作「少」）（○『證類本草』を引いて「少」魚）を作ったが、『本草和名』もこれと同じように引用したものであろう。掖齋按う。『説文（解字）』に「少」、魚名、出棠浪潘國、从魚沙省声」と云う。『玉篇』は「少」、鮫魚」と云う。六書故に「海中所産、以其皮如沙而得名」と云う。則ち、「少」は、沙（魚）、あるいはまた鯊に作るものである。また、『毛詩』（小雅）に「魚麗于「田／留」、〔嘗〕鯊」と云う。『毛詩正義』に、陸「王幾」疎を引用して「魚狹而小、常張口吹沙、故曰吹沙」と云う。『爾雅』に「鯊「它」と云う。『郭璞注』に「今吹沙小魚」と云う。『廣韻』に「鯊魚名、今吹沙小魚」と云う。「少」上に記したとおりであり、その名前の所以は、異なっている。」

## 『日本国語大辞典』第二版

### さめ【鮫】〔名〕

①軟骨魚綱のうち、エイ類を除いたものの総称。体形は紡錘形または延長形で、骨格は軟骨からなる。体表は歯とよく似た構造をもつ皮歯または楯鱗しゆらんと呼ばれるところでおおわれ、ざらざらするものが多い。一般に吻くちはとがり、口は体の下面に開き、歯が鋭い。鰓孔さいこうは体側に五〜七対ある。大きさは全長約二〇センチのツラナガコビトザメから一人に達するジンベイザメまで種類によって異なり、大形種をフカと呼ぶこともある。体内受精で、卵生、卵胎生、胎生などがある。一部の種は凶暴で、ホオジロザメ

など人を襲うものもある。譬びれの有無や鰓孔の数、歯の形態などによって分類される。暖・熱帯の海洋に多く分布。ふつう肉はかまぼこの材料に、ひれは乾燥して中華料理の材料に、皮は研磨用のやすりなどに利用。《季・冬》

\* 出雲風土記〔七三三〕嶋根「凡て北の海に捕るところの雜（なま）の物は、志、鮓（ふぐ）、沙魚（サメ）、烏賊」

\* 本草和名〔九一八頃〕「鮫魚、一名魚皮〔略〕和名佐女」

\* 色葉字類抄〔一一七七〜八一〕「鮫 サメ 魚名 皮有文可以飾刀劍也、 同」

\* 名語記〔一二七五〕六「魚にさめ、如何。答、鮫也」

② 「さめがわ（鮫皮）」の略。

\* 御湯殿上日記・延徳元年〔二四八九〕九月二三日「北はたけよりさめ、御たる三かまいる」

\* 太平記〔十四C後〕三三・公家武家栄枯易地事「只今為立てたる鎧一縮に、鮫懸（サメ）けたる白太刀」

\* 浮世草子・西鶴織留〔一六九四〕四・一「商売見せも、二条通りに、鮫・木葉・書物屋ありと、

諸国の人も見および」

\* 随筆・異説まちまち〔一七四八〕二「鬪死の者を見るに、柄はくだけでぐわたぐわたするやうに

有しとぞ。然れども鮫は掌のうちにくひ入て、死後に取放に掌の皮むけたりと云」

③ 「さめはだ（鮫肌）」の略。

\* 雑俳・軽口頓作〔一七〇九〕「うれにくい・またもどつたがさめかいの」

① 詩集。七編。金子光晴作。昭和一二年（一九三七）刊。日中戦争前後のわが国の軍国主義的弾圧の中

で、国家権力に対する抵抗精神を高度の象徴的手法によって示した詩集。

【語誌】生命力が強く、凶暴な性質が畏怖されることから、古来、靈的な存在と認められてきた。上代の文献に見えるワニは多く鮫を指したといわれる。現代日本語でも、方言で鮫をワニと称する地域（島根県・兵庫県但馬）がある。「古事記・上」の因幡の白兔は、隠岐から本土に渡ろうとして、ワニ

をだました兔が皮を剥がれたというもの。鮫の凶暴さは、これを生け捕る武勇譚を生み、「今昔・二三・二三」や「吾妻鏡・正治二年九月二日」に見出せる。また、中国には、鮫人の伝説があり（「述異記・下」など）、泣くと珠の涙を流すとされ、「謡曲・合浦」の素材となっている。

【方言】魚、かすざめ（糟鮫）。《さめ》福井県坂井郡016大阪府大阪市・和泉016和歌山県海草郡・日高郡064鳥取県米子市016高知市016福岡市016《さめわに》「一鰐」島根県松江市016魚、ねこざめ（猫鮫）。《さめ》香川県伊吹島829魚、あぶらざめ（油鮫）。《さめ》宮城県112鬼ごっこ。《さめ》東京都大島326

#### 【語源説】

① サメ（狭目・狭眼）の義〔東雅・名言通・和訓栞・大言海〕。

② ササメ（少々目）の略〔紫門和語類集〕。

③ サミからか。サは接頭語。ミは魚介の肉の意〔日本古語大辞典〓松岡静雄〕。

④ 鮫肌の意から、サムミ（寒体）の転〔言元梯〕。

⑤ カハメ（皮目）がサラサラと粒だつているところからか〔和句解〕。

⑥ 昼は眠り、夜に目を覚すようであるところから、サメ（覚）の義〔桑家漢語抄〕。

⑦ シラマゼ、シラミエの反〔名語記〕。

⑧ 鯨皮の音転か〔和訓栞〕。沙魚がシャメとなり、サメとなった〔たべもの語源抄所引松村任三説〓坂部甲次郎〕。

⑨ 刃物の義のサヒ（鋤）が変化したもの〔古伝説に見えたる和邇に就いて〓白鳥庫吉〕。

⑩ アイヌ語の、サメ、シャメから〔神話学概論〓西村真次・たべもの語源抄〓坂部甲次郎〕。

【発音】サベ〔紀州・和歌山県〕シメ〔紀州〕平安〇メ／

【上代特殊仮名遣い】青色は甲類に属し、赤色は乙類に属する。サメ

【辞書】字鏡・和名・色葉・名義・下学・和玉・文明・伊京・明応・天正・鰻頭・黒本・易林・日葡・

書言・へボン・言海【表記】鮫(字・和・色・名・下・玉・文・伊・明・天・饅・黒・易・書・へ)  
言)(字・色・名・玉・文・易)鯉・(字)・(名)鮓・鰐(玉)溜魚・(書)鯊(へ)  
「項目」さめの懸守かけまもり。さめの粒つぶ。さめの横飛よことび。

近代デジタルライブラリー

鮫

魚並是假借字、源君以為玉篇鮫字、亦恐屬牽強。陸詞切韻云、鮫、音交、佐米、○下總木有和名、又新撰字鏡、魚皮有文、可以飾刀、劔者也。○按說文云、鮫、海魚、皮可飾刀、玉篇云、鮫、廣、皮有文、陸詞蓋本之、廣韻亦云、鮫、魚名、皮有文、可飾刀、中山經云、漳水出焉、其中多鮫、尺、未、有毒、整人、皮可飾刀、劔口、兼名苑云、錯治材、角今臨海郡亦有之。名砥蕨、音亦與、木草和名、同、按廣雅云、河砥、也、砥、音齒、之、玉篇云、砥、尺、戶、切、鮫、也、廣韻云、砥、處、脂、切、魚、名、音、義、並、異、恐、非、同、字、鮫、字、玉篇廣韻集韻皆不載、鮫一名砥蕨、未、知、所、木、按、玄、應、音、義、云、砥、蕨、律、中、砥、蕨、皆、作、迷、字、應、言、帝、瀾、祇、羅、此、云、大、身、魚、也、則、知、砥、蕨、魚、名、梵、語、對、譯、後、人、從、魚、作、砥、蕨、龍、龜、手、戲、

通主考子頁尺少

龍魚部 龍魚類

ニノイカエ

鮫

鮫音低、翻俗音彌、當是蓋以一大魚為鮫、一名也、兼名苑又以摩竭為鮫、一名其意略同、下總木、砥、作、砥、伊勢、廣、木、同、龍、龜、手、戲、亦、作、砥、按、干、祿、字、書、云、五、砥、上、地、下、正、諸、從、砥、者、此、砥、本、草、云、一、名、錯、魚、上、倉、各、反、○證、類、本、魚、皮、即、裝、刀、靶、錯、魚、皮、也、木、草、和、名、云、鮫、魚、一、名、錯、魚、皮、此、云、一、名、則、源、君、蓋、從、木、草、和、名、引、之、也、說、文、無、錯、字、蓋、是、魚、皮、拾、遺、云、一、交、錯、故、名、錯、魚、後、從、魚、作、鮫、也、名、鯊、魚、上、音、沙、字、亦、作、鮫、○證、類、本、草、引、作、鮫、魚、名、出、樂、浪、潘、國、從、魚、沙、省、聲、玉、篇、鮫、魚、六、書、故、云、鯊、海、中、所、產、以、其、皮、如、沙、而、得、名、則、鮫、或、作、沙、或、作、鯊、也、又、毛、詩、云、魚、麗、于、豔、鮫、豔、正、義、引、陸、璣、疏、云、魚、狹、而、小、常、張、口、吹、沙、故、曰、吹、沙、爾、雅、云、鯊、蛇、郭、注、云、今、吹、沙、小、魚、廣、韻、云、鯊、魚、名、今、之、吹、沙、小、魚、鈔、上、同、者、與、此、所、云、鯊、不、同、其、所、以、得、名、亦、異、